法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-28

フランス16世紀物語文学研究 4―フランソワ・ド・ベルフォレの「悲話集」をめぐって―

白井, 泰隆

(出版者 / Publisher)
法政大学言語・文化センター
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
言語と文化 / 言語と文化
(巻 / Volume)
6
(開始ページ / Start Page)
31
(終了ページ / End Page)
50
(発行年 / Year)
2009-01-31
(URL)
https://doi.org/10.15002/00003621

Hosei University Repository

フランス16世紀物語文学研究 4

── フランソワ・ド・ベルフォレの「悲話集」をめぐって ──

白 井 泰 隆

本稿はフランス16世紀後半に当時のイタリア物語文学作品を翻訳，または翻案して当時のフランスの読者に紹介した短篇物語文学作家，詩人，歴史家，地誌学者などで多才ぶりを発揮したフランソワ・ド・ベルフォレ François de BELLEFOREST（1529?-1583）の「悲話集」Histoires tragiques[1] とその作者の紹介，とくに「悲話集」に関する書誌の研究報告である。

1. 生涯と作品

まず作者 F. ド・ベルフォレについて簡単に紹介する[2]。彼が翻訳などで大いに協力したピエール・ボエチュオ Pierre de BOAISTUAU（1520?-1566）と同じく，詳しい出生年代や出生地は不明だが，おそらく1529年頃，南フランスのガスコーニュ地方のコマンジュ Comminges 伯爵領のリル・ジュールダン L'Isle-Jourdan あたりで生まれたらしい。彼自身は「コマンジュの人」commingeois と称しているが，この地名は現存していなくて，現在のオート・ピレネー Hautes Pyrénées 県とオート・ガロンヌ Haute-Garonne 県にまたがる地域に相当するようである。幼少年時代のことは殆ど不詳であり，1540年頃からトゥールーズ，1543年からペリグーで教育を受けた。南フランスを遍歴した後，ボルドーのギュイエンヌ学寮で学んだ。つまりモンテーニュより数年先輩にあたる。1547年末にボルドーを離れ，再び南仏西部を遍歴したようである。2年後の1549年末までにネラックの王宮で当時国王フランソワ一世の姉マルグリット・ド・ナヴァール Marguerite de Navarre（1492-1549）に拝謁したかどうか不明である。

同じ頃イタリアの物語作家マッテオ・バンデッロ Matteo BANDELLO（1484?-1561）がマルグリット・ド・ナヴァールの宮廷にやはり滞在していた。

Hosei University Repository

この物語文学のジャンルの先駆者であり，約10年後のその作品のフランス語版をボエチュオが出すことになるのだが，彼はバンデッロに紹介されていた。

時代的にずれるかもしれないが，ネラックにやはり滞在していたベルフォレがバンデッロと知遇を得ていたなら，非常に興味深い出会いなのだが資料が無く，あくまでも想像の域を出ない。

1557年末にはパリに定住していたようである。詩人ロンサールに紹介されたり，後に新教徒の指導者の一人のコリニー提督（ガスパール・ド・コリニー）とも親交を結び，提督の北フランスのピカルディー遠征に同行した。1555年頃からパリに落ち着き，そのころ読書，創作に専念していたボエチュオとどういう経緯で知り合ったのか不明だが，2人はバンデッロの作品の翻訳に協力し合うようになった。

ボエチュオは率直にベルフォレの協力ぶりに感謝の気持ちを述べている。

> 「私はつぎのことを皆さんにお知らせしたかった。……この作品の翻訳に際して，コマンジュの貴族ド・ベルフォレ殿のご助力がなければ，この翻訳は刊行されなかった。それほど彼は私に力を貸してくれました。……彼の手による翻訳の第2巻は間もなく出版され，皆さんにお見せできることを私は願っています」[3]。

その成果が1559年初頭，「悲話集」――バンデッロの作品「ノヴェッレ（物語集）」Novelleの仏語訳と称した作品である。ただし第1話から第6話までを収めた第1巻だけがボエチュオの翻訳（実際は大幅な改作）である。残りの第2巻から第7巻まではベルフォレの手に委ねられた。なおボエチュオの「悲話集」とベルフォレの「続悲話集」《Continuation des Histoires tragiques, extraites de l'italien de Bandel, mises en langue Française, par François de Belleforest Commingeois》は1559年1月に同時に出版允許（特認）を得ていた。そして「続悲話集」は同年8月に出版，発売された。その後，次第に詩作と歴史研究その他に没頭するようになり，バンデッロ翻訳から距離を置き始めた。

すでに「第2巻」の冒頭で，つぎのように述べているのでその傾向がうかがえる。

Hosei University Repository

「……「悲話」の題名でローネー殿（ボエチュオ）が始めたバンデッロの物語を続けてみると，……私は他の人たちと同じ驚きを感じた。また同じように自分の計画を進めると快活さや素直さが無くなっていくのを感じた」[4]。

1568 年，国王シャルル 9 世付きの史料編纂官（修史官）となった。同年，「9 人の国王シャルルの歴史」《Histoire des Neuf Roys Charles de France, contenannt la fortune, vertu, et heur fatal des Roys, qui sous ce nom de Charles ont mis à fin des choses merveilleuses》を刊行し，版を重ねた。

その他，歴史家として，つぎのような主要な成果を残した。「世界史」《L'Histoire universelle du Monde》（初版 1570 年），「フランス年代記」《Les Chroniques et annales de France》（初版 1573 年），「フランス大年代記と通史」《Les Grandes Annales et Histoire generale de France》（初版 1579 年）である。

当時のヨーロッパに知られていた世界中の地理的情報だけでなく，政治，宗教，風俗，習慣などもについてもあらゆる知識を網羅したと称する一種の百科全書のような大部の著作（全 3 巻）を発表した。それが「世界事情」《La Cosmographie universelle de tout le monde》（初版 1575 年）である。

自然科学や奇蹟や超自然への関心も持ち合わせていた彼はボエチュオの「奇譚」《Les Histoires prodigieuses》（1560 年）の上梓に協力した縁から，この続篇[5]を 1571 年に発表，好評を博して版を重ねた。

詩人としても，ロンサールやデュ・ベレーなどとの交遊から，若い頃からソネなどを非常に数多く詩篇を残している。

興味はつきないが，細かく彼の著作を列挙する余裕がない。エラスムスが約 50 年前に編纂していたキケロなどの書簡文を参考にしたラテン語の書簡文の手ほどきがすでに存在していた。その種のものでフランス語版の「書簡文入門」《Les Epistres familieres》（初版 1569 年，その後，彼の著作では最も多くの版をかさねた）を最後に挙げておく。

まさに M. シモナン Simonin[6] が研究のタイトルにしたように「文筆で生き」，「インク」を武器に出版界で活躍した初期の文筆家と言っても過言ではないだろう。

1577 年頃から宮廷内の政治に深くかかわるようになり，1580 年にはアンリ

Hosei University Repository

3世と特に親しくなったようである。

若いころはプロテスタントのガスパール提督の側近になりながら，晩年は反宗教改革運動に加わり，その傾向は「悲話集」の文章からもうかがわれる。つまり，艶笑譚や好色な聖職者などのテーマを避け，逆に若者層に道徳的な説教を説く傾向が目立つようになった。その宗教的な立場の振幅の大きさには驚かされる。

波瀾に富んだ生涯のベルフォレは1583年1月早々に没した。その6年後に親しく仕えたアンリ3世が暗殺されたことと彼の故郷と縁の深かったアンリ4世が王位継承したことは勿論知らない。

2. ベルフォレの「悲話集」の出版状況と内容について

つぎに「悲話集」の出版状況について説明する。ボエチュオの「悲話集」の完璧な書誌を作成することはほぼ不可能であるのに反して，ベルフォレのそれは研究者のR. スチュレル Sturel[7] とM. シモナン[8] の献身的な努力により詳細な書誌[9] が完成されている。

煩瑣になるのをご容赦頂いて，以下紹介する。

まず［続悲話集］には，つぎの2版があるが，内容的に整備されていないため独立した第1巻とは見なされていない。

以下通し番号のつぎの（　）内の数字はM. シモナン作成の書誌による。

1（9）1559　Paris　Vincent Sertenas

2（10）1560　Paris　Vincent Sertenas

(1) ［第1巻］の諸版

以下の *付きの版は「悲話集全18話」《XVIII Histoires tragiques. extraites des œuvres italiennes de Bandel, & mises en langue françoise. Les six premieres par Pierre Boisteau surnommé Launay. Les douze suivans par Fran. de Belleforest》というタイトルで出版されたものである。

したがって最初の1話から6話までがボエチュオの作品，後の7話から18話までがベルフォレの作品を収めた合作集である。

Hosei University Repository

年代	出版場所	出版元(出版業)者
*1 (11) 1560	(出版場所，出版元不祥)	(偽版)
*2 (14) 1561	Lyon	出版元不祥 (偽版)
*3 (17) 1563	Paris	Robert Le Mangnier
*4 (17) 1563	Paris	Vincent Norment et Jeanne Bruneau
*5 (17) 1563	Paris	Gilles Robinot
*6 (19) 1564	Paris	Robert Le Mangnier
*7 (19) 1564	Paris	Gilles Robinot
*8 (20) 1564	Lyon	Jean Martin (偽版)
9 (23) 1566	Paris	Robert Le Mangnier (第2巻と表記) (筆者が参照した版)
*10 (27) 1567	Anvers	Jean Waesberghe
*11 (28) 1567	Paris	Robert Le Mangnier
12 (33) 1568	Paris	Jacques Macé (第1，2巻と表記)
*13 (60) 1570	Turin	César Farine (偽版)
14 (80) 1571	Paris	Vincent Norment (第1巻と表記)
*15 (134) 1575	Lyon	Pierre Rollet (偽版)
*16 (159) 1578	Lyon	Pierre Rollet (筆者が参照した版)
17 (172) 1580	Paris	Jean de Bordeaux (XVIIIの表記なし)
18 (172) 1580	Paris	Gabriel Buon (XVIIIの表記なし)
*19 (191) 1582	Turin	César Farine
*20 (250) 1596	Lyon	Benoist Rigaud
21 (266) 1603	Rouen	Adrian de Launay (第1巻と表記)
22 (285) 1616	Lyon	Pierre Rigaud (第1巻と表記)

(2) 話の内容について

以下，簡潔にベルフォレの「悲話集」の内容を紹介する[10]。なお紹介の後のB. 以下の表記はベルフォレが翻訳のもととした原本のバンデッロの「物語集」の巻数，話のナンバーを示す。

その前に各巻に関して，スチュレルは苦労して，つぎのようにまとめたものを紹介する。彼はベルフォレの「悲話集」をつぎの4つのグループに分類した[11]。

Hosei University Repository

A：バンデッロの作品の最初の3巻の各話をベルフォレが翻訳したもの

第1巻　全12話（殆どの版はボエチュオの作品と合本）

第2巻　全18話

第3巻　全18話

第4巻　第1話から第19話まで，ただし，以上の各巻には構成に多少の変更はある。

B：バンデッロの「ノヴェッレ」の第4巻の翻訳について

翻訳者の名前のない全巻（28話）の翻訳で1573年，「第6巻，最終巻」というタイトルを付けてリヨンで出版された[12]（シモナンの書誌には掲載されていない）

C：ベルフォレの翻案の作品

第4巻　第20話から第27話

第5巻　(1)　第8話まで所収

(2)　しばしば新たに4話を加えて「第6巻」のタイトルで重版

第7巻　第12話まで

D：偽　作

第5巻や第6巻に所収されている。主に3つのモデルで構成されている。

(1)　ベルフォレの名を記してないリヨン版の一部または全体

(2)　ベルフォレの許可なしで出版された未刊の3話

(3)　時にはベルフォレの第4巻から借用した他のいくつかの話

(3)　［第1巻］の内容[13]

第1話	ザクセンのアレランとオスマン帝国皇帝オスマン3世の娘アドラジーの恋とイタリアへの逃避行	B：Ⅰ-27
第2話	誤って姦通を咎められたギュイエンヌの貴婦人	B：Ⅰ-24
第3話	淫乱で残酷なミラノの令嬢	B：Ⅲ-52
第4話	残酷なアルバニアの騎士	B：Ⅰ-51
第5話	不倫をした息子のユーグ伯爵にフェラーラ侯ニコラ・	

Hosei University Repository

	デステが課した罰	B：Ⅰ-44
第6話	粉屋の娘に対するアレッサンドロ・デ・メディチの寛大な振る舞い	B：Ⅱ-15
第7話	単純なヴィルレ殿の復讐	B：Ⅲ-17
第8話	トレビゾンド皇帝に対するメグオロ・レルカロの復讐	B：Ⅱ-14
第9話	自分の主人の非業な死の復讐をするイスラム教徒の奴隷	B：Ⅰ-52
第10話	シャブリ・プロヴァンスの奥方とその代訴人トロニオの淫らな愛の不幸な結末	B：Ⅱ-33
第11話	恋するあまり罪を犯したミラノの老貴族	B：Ⅲ-33
第12話	苦労して愛する女性と結婚できたスペイン貴族ドン・ディエゴ	B：Ⅰ-27

(4) ［第2巻］の諸版

1 (22) 1565	Paris	Vincent Norment & Jeanne Bruneau
2 (23) 1566	Paris	Robert Le Mangnier（筆者が参照した版）
3 (29) 1567	Paris	Vincent Norment & Jeanne Bruneau
4 (33) 1568	Paris	Jean Macé（偽版の疑い）
5 (50) 1569	Paris	Jean Macé
6 (61) 1570	Turin	César Farine（偽版）
7 (81) 1571	Paris	Vincent Norment
8 (165) 1579	Lyon	Estienne Plessier
9 (173) 1580	Turin	César Farine
10 (174) 1580	Paris	Jean de Bordeaux
11 (234) 1591	Lyon	Benoist Rigaud
*12 (250) 1596	Lyon	Benoist Rigaud
13 (267) 1603	Rouen	Adrian de Launay
14 (267) 1603	Rouen	Pierre L'Oyselet
15 (286) 1616	Lyon	Pierre Rigaud

Hosei University Repository

(5) ［第２巻］の内容

第１話	アントニオ・ボローニャ殿とマルフィ公女との不幸な結婚と痛ましい最期	B：Ⅰ-26
第２話	チェランティ伯爵夫人の乱れた生活と受けた罰	B：Ⅰ-4
第３話	自分の敵に対するシエナの貴族の寛大な振る舞い	B：Ⅰ-49
第４話	１人は歓喜で，もう１人は苦悩で共に息絶えた恋人たち	B：Ⅰ-33
第５話	ノセールの貴族と城主夫人との不倫の残酷な結末	B：Ⅰ-55
第６話	漁師にも礼儀正しいモロッコ国王	B：Ⅰ-57
第７話	ジュリー・ド・ガズールが被った被害と痛ましい死	B：Ⅰ-25
第８話	恋したミラノの貴族に起きた出来事	B：Ⅰ-28
第９話	婚礼の夜，落雷にあったナポリの青年	B：Ⅰ-14
第10話	追いかけまわす神父から逃れ，逆にそれを罰した若い娘	B：Ⅱ-7
第11話	貪欲な主任司祭を罰したミラノ公ジャン・マリア	B：Ⅲ-25
第12話	嫉妬のあまり愛人を殺し，自らも死を選んだローマの女性	B：Ⅱ-5
第13話	自分の主人に殴られたので酷い復讐をしたムーア人の奴隷	B：Ⅲ-21
第14話	墓の中で呪術を行っていると信じて，恐怖のあまり死んだボローニャの学生	B：Ⅲ-19
第15話	絵師に夢中になってしまい，恋人を捨てた若い女性	B：Ⅲ-23
第16話	愛する女性に高潔な態度で接したジュネーヴの貴族	B：Ⅱ-26
第17話	アフリカ・デュブデュの領主マホメットを寛大に遇したモロッコ・フェズ王サイシュ	B：Ⅱ-52
第18話	イングランド王に結婚を反対されたため心中した恋人たち	B：Ⅲ-60

(6) ［第３巻］の諸版

1 (34) 1568	Paris	Gabriel Buon ou Jean de Bordeaux（筆者が参照した版）
2 (50) 1569	Paris	Jean Macé
3 (51) 1569	Turin	César Farine（偽版）（筆者が参照した版）

Hosei University Repository

4 (52) 1569	Paris	Jean de Bordeaux
5 (53) 1569	Anvers	Jean Waesberghe（偽版）
6 (95) 1572	Paris	Gabriel Buon ou Jean de Bordeaux
7 (127) 1574	Lyon	Pierre Rollet（偽版）
8 (175) 1580	Paris	Jean de Bordeaux
9 (179) 1581	Lyon	Pierre Rollet
10 (192) 1582	Pari	Jean de Bordeaux
11 (243) 1594	Lyon	Benoist Rigaud
12 (269) 1604	Rouen	Adrian de Launay
13 (269) 1604	Rouen	Pierre L'Oyselet
14 (287) 1616	Lyon	Pierre Rigaud

(7) ［第3巻］の内容

第1話	ヴェネツィアの2人の奥方の策略	B：Ⅰ-15
第2話	自分の夫の処刑を聞いて，悲しみのあまり死んだ奥方	B：Ⅰ-13
第3話	妻の告白を聴くため告解室に隠れ，後で妻を殺した夫	B：Ⅰ-9
第4話	とっくに諦めていたが，やはりだまして愛していた女性をものにした貴族	B：Ⅰ-16
第5話	嫉妬に狂って愛する女性を殺し，自らも死を選んだロンバルディアの男	B：Ⅰ-20
第6話	愛した女性に寛大さと高い徳を示したオスマン3世	B：Ⅰ-18
第7話	ローマ時代のヌミディア王マフィニッサとソフォニスベの愛	B：Ⅰ-41
第8話	絶望してアディジョ川に身を投げようとして，想う奥方の愛を得たコンスタンティン・ボッカリ	B：Ⅰ-47
第9話	恋するあまり，嫉妬で首をくくったモデナの男	B：Ⅰ-43
第10話	不倫をしている妻を罰したシエナの貴族	B：Ⅰ-12
第11話	捕虜となったヴァンダル公アンリに寛大に謝意を表したエジプトのスルタン	B：Ⅲ-57
第12話	恋した女性の貞操を奪うため宗教を利用した男	B：Ⅲ-19
第13話	生きながら死んだ恋人と共に埋葬されたが，危機一髪で救われたランドルフ・ネト	B：Ⅲ-1

Hosei University Repository

第14話　貴族と称して自分の主人の娘を誘惑したフランドルの男　B：Ⅲ-7

第15話　親族や忠実な召使たちを大虐殺したトルコ皇帝メフメット2世　B：Ⅱ-13

第16話　言い寄ってきたコトロン侯爵を最初は軽蔑していたが，やがて恋してしまう。だが何も報われずに死んだレオノール・マケドニア　B：Ⅱ-22

第17話　傲慢な男が恋をしたが，その不幸な結果　B：Ⅱ-38

第18話　メッシーナのティンブレ・ド・カルドンネとフェニテェ・レオナティの恋　B：Ⅰ-22

(8)　［第4巻］の諸版

1 (62) 1570	Paris	Gabriel Buon ou Jean de Bordeaux
2 (82) 1571	Turin	Jérôme Farine（偽版）（筆者が参照した版）
3 (96) 1572	Paris	Jean de Bordeaux
4 (128) 1574	Turin	César Farine（偽版）
5 (160) 1578	Lyon	Jérôme Farine
6 (176) 1580	Paris	Jean de Bordeaux
7 (235) 1591	Lyon	Benoist Rigaud
8 (244) 1594	Lyon	Benoist Rigaud
9 (270) 1604	Rouen	Adrian de Launay
10 (270) 1604	Rouen	Pierre Calles
11 (288) 1616	Lyon	Pierre Rigaud

(9)　［第4巻］の内容

第1話　廷臣のアリオバンザンクと寛大さを競ったペルシア王アルタクセルクセス　B：Ⅰ-2

第2話　エジプト王の財宝をまんまと盗み，巧みにその婿になったこそ泥　B：Ⅰ-25

第3話　婚約者との約束を守らなかったために手ひどい罰を受けたフィレンツェの貴族ブオンデルモント・ド・ブオ

Hosei University Repository

ンデルモンティ　B：Ⅰ-1
第4話　フランス王女ジュディトを誘惑して妻として迎えたボードワン・ド・フランドル　B：Ⅰ-7
第5話　ローマ皇妃ファウスティネの愛と裏切り　B：Ⅰ-36
第6話　廷臣の愛に忠実な友情で応えたハンガリー女王アンナ　B：Ⅰ-45
第7話　愛していた男に捨てられたが，小姓に変装して仕えて，その男の愛を取り戻した娘　B：Ⅱ-5
第8話　恋人と旅行中に親に無理やり結婚させられた若い娘。失神した彼女は死んだと思われて埋葬された。今度は恋人の方が墓の中で生きている彼女を見つける　B：Ⅱ-41
第9話　自分の息子を救うために妃に言い寄っていた男の言う通りにしたシリア王セレウクス1世　B：Ⅱ-55
第10話　愛する女性から軽蔑され，絶望して首を吊ったシエナの貴族　B：Ⅱ-58
第11話　夫に捨てられたと思い込み服毒自殺を図ったが，夫の愛を取り戻し，生き返った若い妻　B：Ⅱ-40
第12話　妻に嫉妬して殺そうとしたが，誤って娘を殺したマントヴァの男　B：Ⅰ-59
第13話　自分たちが十分に生きたと分かったとき，自ら死を選べるイドルーズ島の島民の習慣　B：Ⅰ-58
第14話　奴隷の身分から絵画によって抜け出したフィレンツェの画家フィリッポ・リッピ　B：Ⅰ-56
第15話　メギストネという女性の指揮で暴君のアリストティムに復讐するエリの人びと　B：Ⅲ-5
第16話　嫉妬から自ら死んだテオドール・ジジム　B：Ⅲ-37
第17話　パンテイアに対して禁欲を守ったペルシアのキュロス王　B：Ⅲ-9
第18話　想う女性に愛されようと何度も危険な目にあうが，報われないと知り諦めたスペインの騎士　B：Ⅲ-39
第19話　アルボワンの王妃ローズモンドの王殺しと彼女自身の死　B：Ⅲ-18

Hosei University Repository

(10) ［第5巻］の諸版

全8話や全12話所収の第5版と称する版も以下のリストに載せてある。また第6版に入れている全集版もある[14]。

1 (63) 1570	Paris	Jean Hulpeau
2 (83) 1571	Lyon	Benoist Rigaud
3 (97) 1572	Paris	Jean Hulpeau ou Gervais Mallot（筆者が参照した版）
4 (136) 1575	Paris	Jean Hulpeau ou Gervais Mallot
5 (145) 1576	Lyon	Benoist Rigaud
6 (177) 1580	Paris	Jean de Bordeaux
7 (180) 1581	Lyon	Benoist Rigaud
8 (193) 1582	Paris	Gabriel Buon（筆者が参照した版）
9 (194) 1582	Paris	Gabriel Buon ou Jean de Bordeaux
10 (202) 1583	Lyon	César Farine（偽版）
11 (217) 1585	Lyon	César Farine（偽版）
12 (261) 1601	Lyon	les héritiers de Benoist Rigaud
13 (271) 1604	Rouen	Adrian de Launay
14 (271) 1604	Rouen	Pierre Calles
15 (272) 1604	Rouen	Pierre L'Oyselet
16 (278) 1606	Lyon	les héritiers de Benoist Rigaud

(11) ［第5巻の内容］

バンデッロとの照合が難しくなったことと偽作も次第に挿入されるようになったので，話の内容，傾向の分類を試みた結果をつぎに示す。

1. 殺人が行われる話　第4話，第6話，第8話
2. 復讐をする話　第2話，第5話
3. ハッピーエンドの話　第3話，第9話
4. 歴史上の出来事　第1話，第10話，第11話，第12話
5. 残酷な行為の話　第7話

このうち2.のグループの第5話がシェイクスピアの「ハムレット」の材源

Hosei University Repository

の一つと言われている。しかしハムレットとその作品に関しては種々の種本がシェイクスピア以前にすでに存在していた。

古くはデンマークの伝説や半ば伝説の英雄アムレート Amleth が登場する12世紀末期から13世紀初頭のサクソ・グラマティクスの全16巻のデンマーク史「デンマーク人の事跡」Gesta Danorum の影響も考慮する必要があるだろう。またトマス・キッド作と言われている劇作品（原ハムレット）も勿論無視できない。だがベルフォレの翻案がトマス・キッドの作品よりも20年近く早い時期に刊行されていたことを無視できないだろう。

微妙な影響関係の決定は別にして，本稿では，諸版で話の冒頭にある簡単な梗概の和訳を紹介する。ただし人名などはフランス語読みで表記する。

「父の弟のファンゴン Fengon に父オルヴァンディーユ Horvvendille が殺され，その後デンマーク王となったアムレート Amleth がどのような策略で父の復讐をしたか，また彼の話のその他の出来事」[15]。

(12) ［第6巻］の諸版

第5巻から次第に偽作が所収されてくる。また第5巻を第6巻とタイトルを変更して出版するケースもあるが，ベルフォレの翻案の作品は含まれない。

1 (195) 1582	Paris	Jean de Bordeaux ou Gabriel Buon（筆者が参照した版）
2 (202) 1583	Lyon	César Farine（偽版）
3 (272) 1604	Rouen	Adrian de Launay ou Pierre Calles ou Pierre L'Oyselet[16]（筆者が参照した結果，第5巻から8話，第7巻から2話を合わせた版）

(13) ［第6巻の内容］

1. 殺人が行われる話	第5話，第11話，第27話，第30話，第33話
2. 復讐をする話	第6話，第10話
3. ハッピーエンドの話	第7話，第12話，第18話
4. 裏切りや欺瞞の話	第13話，第14話，第20話（同一内容である第23話，第26話），第22話，第24話，第25

Hosei University Repository

	話，第 32 話
5. 歴史上の出来事	第 1 話，第 2 話，第 4 話，第 8 話，第 9 話，第 15 話，第 19 話
6. 残酷な行為の話	第 3 話，第 31 話
7. 罰を受ける話	第 16 話
8. 不倫の話	第 21 話
9. 日常にあった出来事	第 28 話，第 29 話

(14) ［第 7 巻］の諸版

R. スチュレルは全 12 話すべてがベルフォレの翻案だと記述している[17]。しかし，話の内容や全体の構成のバランスを考えると偽作がかなり含まれてると思われる。

1 (196) 1582	Paris	Gervais Mallot ou Emmanuel Richard
2 (203) 1583	Paris	Emmanuel Richard
3 (204) 1583	Lyon	Estienne Plessier（偽版）
4 (246) 1595	Lyon	Benoist Rigaud
5 (273) 1604	Rouen	Adrian de Launay
6 (273) 1604	Rouen	Pierre L'Oyselet
7 (273) 1604	Rouen	Pierre Calles

(15) ［第 7 巻の内容］

1. 殺人が行われる話	第 11 話
2. 復讐をする話	第 2 話
3. 裏切りや欺瞞の話	第 3 話，第 4 話，第 5 話，第 6 話，第 7 話，第 10 話，第 12 話
4. 歴史上の出来事	第 1 話，第 9 話
5. 不倫の話	第 8 話

(16)

他に「悲話集」の抄録「悲話集抄」《Discours memorables de plusieurs Histoires tragiques》または《Le thresor des Histoires tragiques》が存在す

Hosei University Repository

る。つぎの 4 版である。

1 (63) 1570	Paris	Jean Hulpeau
2 (83) 1571	Lyon	Benoist Rigaud
3 (182) 1581	Paris	Gervais Mallot
4 (268) 1603	Rouen	不詳

(17) 偽版について

まず各巻の諸版の書誌を見ると偽版（つまり出版許可（特認）を得た出版業者の許可なく出版した，いわゆる海賊版）がかなり出版されていることに気づく。16 世紀後半の当時は著作権などは勿論認められていない時代であり，偽版を出版しても刑事的にも，道義的にも追及されない状況だったと容易に想像できる。偽版を多く出版していた書肆では，イタリア・トリノとリヨンのセザール・ファリンヌ César Farine などはその典型である。

こうした偽版も含めて，「悲話集」が多くの版を重ねた理由を考えてみる。当時の酸鼻を極めた宗教戦争の惨禍を人びとは目の当たりにしていた。そうした現実からの逃避の一つの手段として，「悲話集」のようなジャンルの作品の購読に求めたのだろうと思う。読者，つまり購買層は貴族などの一部の識字階級に限られるが，彼らは重版や続篇の出版，発売を熱望していた。

そうした旺盛な需要に応えるために出版業者が安価で小型本の全集版などを既刊の巻をかき集めて刊行することもあったようである。そのため同じ内容の話が別の巻に重複して収められている例は珍しくない。

どうしても手当てがつかない場合に偽版に手をつけたのだろう。出版業者だけでなく，有力な印刷業者，書籍商なども勝手に印刷して，売りさばいたというケースも否定できないと思う。

また当時の宮廷のミスだが，特認（出版許可，出版允許）の期間が大体 6 年から 10 年と長期なため，同一作品の出版を何年もの間に複数の出版業者に特認を認めたこともあった。いずれにしても当時の混乱を極めた出版界を反映していたようである。

(18) 偽作者の登場

しかし以上のように差し迫った状況にもかかわらず，ベルフォレは既にバン

Hosei University Repository

デッロの作品の翻訳から手を引いてしまっていた。そこで出版業者は偽の翻訳者，偽の翻案者，偽の創作者を使うことを思いついたと思う。翻訳権も翻訳契約も全く存在しない時代のあだ花とでも言えるゴースト・トランスレイターやゴースト・ライターたちが登場した。R. スチュレルは「文芸職人」ouvrier de lettres[18] と名付けている集団だが，今日ではその正体を特定することは到底不可能である。

16 世紀前半のフランス，殊にリヨンの出版界については，我が国でも優れた研究[19] があるが，偽版の多さや「文芸職人」の存在などによって 16 世紀後半の混乱した時代の出版界の暗部の一面を垣間見た感じする。いろいろ想像できるミステリーめいた雰囲気があったかもしれないので，面白いテーマになると勝手に期待している。ただし，資料は殆ど皆無なため解明することはまず望めない。

(19) 第 5 巻以後の話の内容

話の内容を概観すると，中世以後の伝統的なコントやヌーヴェル，笑話が少し復活していると思われる。つまり，裏切りや欺瞞がテーマの話であり，不倫をした妻が夫に問い詰められてもまんまと言い逃れる話などである[20]。さらに第 6 巻 28 話や 29 話のように日常生活で身辺に起きるような平凡な題材の話が収められるようになっている点にも注目したい。これも才能に乏しい偽作者が物語の数を増やすことに努めた結果ではないだろうか。いずれにしても最後には短篇物語文学の伝統に回帰し，それに頼った創作をするほかなかったのだろう。

最後に第 4 巻 14 話でフィレンツェの画家フィリッポ・リッピが題材になっていたが，第 5 巻以後では歴史に題材をとり，歴史上有名な人物が主人公となった物語も増えてきている。例えば，第 5 巻 1 話「皇帝フェデリコ 2 世」，第 6 巻 13 話「ミラノ公ガレアス・スフォルツァ」，第 7 巻 6 話「オスマントルコ皇帝オスマン 3 世」，同 9 話「スペイン・フェリペ 2 世」などである。

4. 今後の展望

枠物語として「デカメロン」から「エプタメロン」，その初版に関わりがあったボエチュオとベルフォレ 2 人の「悲話集」とジャック・イヴェール Jacques

Hosei University Repository

YVERの「春」《Le Printemps》(1572)，さらにベニーニュ・ポワスノ Bénigne POISSENOTの「夏」《L'Esté》(1583) と「新悲話集」《Les Nouvelles Histoires tragiques》(1586)，そしてヴェリテ・アバン Vérité HABANCの「新悲話・笑話集」《Les Nouvelles Histoires tant tragiques que comiques》(1585) の一連の展開をたどってみたいと思う。

翻訳者や短篇物語作家の献辞と「読者への緒言」の検討から彼らの翻訳観や当時の翻訳文化の一端でも窺い知れればと期待している。

16世紀終盤から17世紀初頭にかけての群小感情物語作家や感情小説家たち，すなわちジョゼフ・ド・ラ・モット Joseph de la Mothe，ジャン・プレヴォ Jean Prévost，ジャン・ダントラ Jean d'Intras，アントワーヌ・ド・ネルヴェーズ Antoine de Nervèze，ピエール・ボワテル Pierre Boitel，マランゲル・ド・サン・ラザール Mallangre de Saint-Lazare，ジャン・ピエール・カミュ Jean-Pierre Camus が挙げられる。彼らは17世紀になって開花したフランス感情小説の発展においてしかるべき位置を占めている。彼らの評価を自分なりに行いたいと計画だけは大きくなるが，最終的には自分の体力，気力，そして16世紀や17世紀に印刷された書籍の不鮮明な活字をそのまま読み通せる視力と最後に勿論時間との勝負だということを認めざるを得ない。

《注》

(1) ベルフォレと「悲話集」に関して，つぎの2人の労作を特筆すべき業績として列挙し，少しコメントを付しておく。

・ルネ・スチュレル René STUREL：「16世紀フランスにおけるバンデッロ」《Bandello en France au XVIe siècle》(1918, Slatkine Reprint, 1970)

— 後述のボエチュオと共に取り上げ，発表後，90年も経つが，その評価は依然として高いものである。書誌などで訂正すべき点が多少あるが，バンデッロの原文との詳細な比較は非常に啓発される点が多い。同時にバンデッロの作品の翻訳に関して，詳しい考察を加えている。

・ミシェル・シモナン Michel SIMONIN：「フレンソワ・ド・ベルフォレ「悲話集」第1巻のバンデッロ翻訳者」《François de Belleforest traducteur de Bandel dans le premier volume des *Histoires tragiques*》(1982) (M. シモナンの遺稿集：「インクと栄光」《L'encre et la lumière》(Droz, THR 391, 2004) に所収

— 第1巻全12話の翻訳の長さとバンデッロの原文の長さの比較など教えられる点が少なくない。そしてボエチュオに関する優れた論考が収められている。

Hosei University Repository

・同上：「16 世紀にペンで生きる　あるいはフランソワ・ド・ベルフォレの経歴」《Vivre de sa plume au XVIe siècle ou la carrière de François de Belleforest》(Droz, THR 268, 1992)

— 完璧と言えるベルフォレの全業績（重版も含めて 298 点）の調査と「悲話集」の複雑な書誌を整備した業績には感服するばかりである。本稿作成に際して大いに参考にさせて頂いた。

（2） ボエチュオに関して，拙稿「フランス 16 世紀物語文学研究 3 —— ピエール・ボエチュオの「悲話集」をめぐって 1 ——」（法政大学言語・文化センター紀要「言語と文化」第 3 号，2006 年 1 月，63-77 頁）において拙い紹介をした。それに反して，前掲のスチュレルとシモナンは詳しい指摘をしている。主な点を紹介するとつぎの通りである。

スチュレル：「ロミオとジュリエット」に関して，イタリアの物語作家ルイジ・ダ・ポルタ Luigi da Porta（1485-1529）を紹介した。バンデッロ，ダ・ポルタ，ボエチュオの原文や翻訳文を 3 者並列して詳細な検討を加えている個所は圧巻である。

シモナン：ボエチュオの家系に関して「洗礼証明書」などの実証的資料を新たに発見した。またボエチュオをめぐる周囲の人物（教えを受けた師たちなど）の調査は目を見はるものがり，実証的研究を志す者には模範である。50 代で夭折したことは惜しみてもあまりある。なお，注（3）の E. カールはこの研究を下敷きにして彼の Introduction を書き上げたと想像している。

（3） 《Je t'ay bien voulu advertir que le seigneur de Belleforest, gentilhomme Commingeois m'a tant soulagé en ceste traduction qu'à peine fust-elle sortie en lumière sans son secours, ...

… j'espère qu'il te fera voir le second tome bien tost en lumière traduict de sa main …》

P. Boaistuau: 《Histoires tragiques》(Edition critique publiée par Richard A. CARR. Société des Textes Français Modernes. Paris, Librairie Honoré Champion, éditeur. 1977) p. 6. Advertissement au lecteur

（4） 《... ayant continue le discours de Bandel commence par le Sieur de Launay, sous le tiltre d'Histoires tragiques, ... je senty un pareil estonnement que les autres et une mesme perte de ma gaillardise et naïveté à poursuyvre mon enterprise. ...》

François de Belleforest: 《Histoires tragiques》第 2 巻，p. 4（Robert Le Mangnier, 1566）

（5） 「奇譚」の全集版は 16 世紀末に全 6 巻で完成した。第 1 巻は勿論ボエチュオが先ず編纂し，第 3 巻と第 5 巻をベルフォレが担当した。(Ed. Carr. Introduction. p. XLIV, n. 43)

（6） 注（1）参照。

（7） 前掲の「16 世紀フランスにおけるバンデッロ」56-59 頁。

Hosei University Repository

(8) 前掲の「16 世紀にペンで生きる　あるいはフランソワ・ド・ベルフォレの経歴」233-307 頁。

(9) 同上書，309-312 頁。

(10) (7)のスチュレルの簡単な各話の紹介と「悲話集」の各話の冒頭にある概略を参考にして作成した。イタリア語やスペイン語と思われる人名や地名などは原音に近い読み方に心がけたが，やむを得ない場合はフランス語風に取り敢えず読むことにした。

(11) R. スチュレル：前掲書，48 頁。

A. Nouvelles tirées des trios premières parties de Bandello, traduites par Belleforest.

T. I (douzes nouvelles); réuni le plus souvent au recueil de Boaistuau;

T. II (dix-huit nouvelles);

T. III (dix-huit nouvelles);

T. IV (les dix-neuf premières nouvelles).

Dans certaines editions la composition de ces recueils est un peu modifiée.

B. Quatrième partie de *Nouvelles* de Bandello:

Traduction complète anonyme (vingt-huit nouvelles) publiée en 1573 sous ce titre:

Le sixième et dernier volume ..., Lyon.

C. *Histoires tragiques* de l'invention de Belleforest:

T. IV (les sept dernières histories)

T. V 1re rédaction (huit histories)

2e rédaction, souvent réimprimée sous le titre de tome VI (augmentee de quatre histories nouvelles);

T. VII (douze histories).

D. Contrefaçons.

Sous le titre de tome V ou de tome VI, deux modèles principaux composés d'une partie ou de l'ensemble du recueil anonyme de Lyon, de trois nouvelles inédites de Belleforest, publiées sans son autorisation, et quelquefois d'autres nouvelles de Belleforest, empruntées à son quatrième tome d'*Histoires tragiques*.

(12) M. シモナンの書誌では，1573 年に出版された「第 6 巻」は存在していない。シモナン，前掲書，311 頁。

(13) Michel SIMONIN：「フレンソワ・ド・ベルフォレ「悲話集」第 1 巻でのバンデッロ翻訳者」《François de Belleforest traducteur de Bandel dans le premier volume des *Histoires tragiques*》(1982) の 42 頁注(54)でおそらく頁数によるバンデッロとベルフォレの作品の長さの比較をしている。印刷素材，構成，書物のサイズなどを考慮すべきだが，比率の数字が重要であり，ベルフォレの加筆の多さを M. シモナンは強調している。その表を示すことにする。ベルフォレの第 1 巻（または全 18 話悲話集）の各話を取り上げている。

Hosei University Repository

	ベルフォレ	バンデッロ	比率
第1話（または7話）	67	16.5	4倍
第2話（または8話）	37	4.5	8倍
第3話（または9話）	40	9	4.4倍
第4話（または10話）	27	5	5.4倍
第5話（または11話）	49	7.5	6.5倍
第6話（または12話）	41	3	13倍
第7話（または13話）	65	10	6.5倍
第8話（または14話）	36	7	5.1倍
第9話（または15話）	23	4	5.75倍
第10話（または16話）	44	6.5	6.76倍
第11話（または17話）	22	4	5.5倍
第12話（または18話）	110	31.5	3.20倍

(14) 注(16)などは典型的な例である。

(15) Jean Hulpeau 版（1572），p. 149.
《Avec quelle ruse Amleth, qui depuis fut Roy de Dannemarch, vengea la mort de son père Horvvendille, occis par Fengon son Frère, et autre occurrence de son histoire.》

(16) つぎの順番で構成した。他の版では第5巻2話，同3話，同5話，同7話，同11話，同10話，同8話，同1話，そして第7巻11話，同12話。

(17) 注(11)参照。

(18) R. スチュレル，前掲書，39頁。

(19) 宮下志朗：「本の都市リヨン」（晶文社，1989），179頁には1596年の「悲話集」の第1巻の出版元のブノワ・リゴーの名がある。リゴーは呼び売り人が売り歩く「瓦版」発行元の大手書籍商であった。

(20) 例えば，第6巻22話：「夫が妻の部屋に入ってきたかったとき，妻（愛人）と一緒にいた学生が隠れるために素早くめぐらした策略」Subite ruse d'un escolier estant avec son amoureuse, pour se cacher lorsque le mary vouloit entrer en sa chambre.

（フランス16世紀文学・法学部教授）